

会報 安曇野教育

第74号

発行所 安曇野市教育会
発行人 西川 友人
編集 会報委員会

発行日 令和4年12月22日
題字 川田 殖

「年老いても咲きたての薔薇」

常任委員長



茨木のり子さんの詩『汲む —Y・Yに一』の存在を知ったのは、教員生活も後半にさしかかった頃。茨木さんが若い時に出会った素敵な人（Y・Yさん）からいただいた言葉の意味を汲んで、自分の生き方を見つめていく様が綴られている。以来、折に触れて読み返している。読み返すというより、その中の一節「人を人とも思わなくなったとき 墮落が始まる」が

ふっと思い出され、自分を戒めるようにしている。

例えば、子どもの指導をしていて「こんなに一生懸命指導しているのに、どうしてこの子は動かないのだろう。悪いのは子どもだ」と思う時。

例えば、保護者の要望を聞いていて「学校は子どもの事を思って指導しているのに、何故、こんなことを言うのだろうか。保護者の考えの方がおかしい」と思う時。

自分は思い上がっていないか。子どもが下で、こちらが上になっていないか。

子どもが動かない理由、その背景にあるものを考えているだろうか。

保護者がそう訴える理由、親が子どもを思う気持ちを思いやっているだろうか。

どれだけ年を重ねても、経験を重ねても「これが正解」というものがない教師の仕事。

50代、60代であっても、何かあると同僚に聞き、教えてもらう事を厭わない先生、子どもの事を思って保護者と共に考えていこうとする先生、時間があれば子どもと遊んでいるか話を聞いている先生。そんな先生方の顔は若々しく輝いている。

年は関係ない。外に向かって開かれている心こそ大切なのだと思う。

茨木さんの言葉のように「年老いても咲きたての薔薇」でありたい。

安曇野往来

木曾で学んだ「地域にある学校」

木曾町立木曾町中学校

7年前に福島中学校と三岳中学校が統合され誕生した本校は、素晴らしい自然環境に恵まれた全校生徒 154 名の学校です。御嶽海関の母校であり、全国的に相撲の強豪校として知られています。

木曾町中学校で2年目を迎えた今年度は、「『ふるさと木曾』に向き合う」ことを重点目標の一つに据えました。木曾は、少子高齢化など多くの課題を抱えていますが、その課題に前向きに取り組んでいる「カッコいい大人」が大勢います。そこで、「地域の課題に向き合う機会と課題に取り組んでいる人との出会いを大切にしよう」と、総合的な学習の時間の見直しを図り、生徒や先生方とともに取り組んでいます。1年生で「ふるさと木曾」の豊かさや課題を学び、2年生で産業や福祉、平和などについて「ふるさと木曾」で学び、3年生では木曾の課題について発信し行動することで、「ふるさと木曾」で生きる力を育む取り組みをしています。先日も2学年の生徒が、「木曾町の災害対策のためにできることは何だろうか？」という単元を貫く問いを設定し、「わかりやすく使いやすいハザードマップ」を町の人に提案しようと追究していました。

このような取り組みの中で、生徒の学びに支援を惜しまない地域の皆さんとそなたちとの出会いから多くのことを学ぶ生徒の姿に触れ、私は「地域にある学校」という当たり前のことの大切さを改めて実感しています。

地域の皆様に支えられて

高森町立高森北小学校

高森北小学校の校舎周辺は自然にあふれ、子どもたちはその恵まれた環境の中で、元気に学校生活を送っています。学校近くの「天伯峡」では、地域住民によるホタル保全活動が行われ、北小学校の児童もホタルの育成や幼虫の放流などを通じて、高森町山吹地区の自然保全活動の一役を担っています。(6月下旬から7月上旬は、ほたるがたくさん飛び交う幻想的な景色を間近で見ることができます。)

高森北小学校は、明治5年創立以来、今年度で創立150周年を迎えることとなりました。創立以来の学校の変遷を紐解く中で、どの時代にも、学校を地域の皆様が守り、支えてきてくださったことを強く感じています。

今年度実施される学校行事に合わせて記念事業を行っています。記念事業を通して、地域の方々に子ども達の学校での様子を知っていただくことにより、更に北小学校との繋がりが深まり、地域の皆様の愛校心をより育むことができていると実感しています。また、地域の方から温かな嬉しい感想もたくさんいただいております。地域の方に大切に守られていることにありがたい思いでいっぱいです。「150年大切にされてきた学校」「そこに集う私たち」であることに、子どもたちが喜びを感じることができる1年間になって欲しいと願っています。

私も高森北小学校・山吹地区でしか体験できない活動を大いに楽しみ、どっぴりと山吹の地に浸かりたいと思っています。

時代が変化する中で

北信教育事務所学校教育課

北信教育事務所学校教育課は、長野県庁東側の道路を挟んだ長野合同庁舎5階にあります。ここで社会科担当としてお世話になり、2年目となります。

昨年度は、一人一台端末の整備に伴って、ICT利活用に関する学校訪問が多くありましたが、今年度は、思考ツール等を使ったICTの効果的な活用に関する内容に加え、「どうすれば子どもたちが意欲的に学ぶ社会科の授業になるか」を大事にした授業づくりに関する学校訪問も増えました。先生方が教材研究に力を入れ、子どもが社会的事象を自分事として捉えながら、問いを追究していく授業にしたいという願いが感じられます。ICTの活用など新しいことを取り入れながらも、時代が変化する中でも変わらない、子どもの疑問から問いが生まれ、問いを追究する面白さや解決する喜びを味わうことを授業づくりの真ん中におくことが、子どもの学びを充実させるためには不可欠であると感じます。両者を適切に組み合わせたベストミックスの授業のあり方を、これからも先生方と一緒に考えていきたいと思えます。

安曇野では、子どもと子ども、子どもと教師、学校と地域などのつながり合いが、高め合うことに結び付くことを学びました。これからも先生方とつながり合いながら、ともに前進していけるよう精進してまいりたいと思えます。

「学び続けること」

松本市立信明中学校

昨年度から松本市立信明中学校にお世話になっております。昨年度の勤務初日を迎えるにあたり、かなり緊張していました。それは、松本市で勤務するのが初めてであり、地域や生徒のことをよく知らない初めての地で自分の力が通用するのだろうかという不安があったからです。加えて、年齢的な立場としてリーダーシップを発揮することを周りから求められるのに、不安だらけの自分にそんなことができるのだろうかというさらなる不安もありました。

そこで、生徒にも先生方にもどんどん聞いて教えてもらうことにしました。私の今までの経験や知識だけで判断することをなるべく避け、また、先生という立場や年齢としての立場は捨て、とにかく生徒や先生方に聞いて、一緒に考えることを心がけました。そのおかげで、私自身が多くのことを学ぶことができました。加えて、私よりもしっかりとした生徒がクラスや授業、学校生活の色々な場面で力を発揮し、先生方には力不足の私を支えていただきつつ新しい刺激をいただいて、私なりの力でお役に立てているような気がしています。もしかしたら、私の思い違いかもしれませんが、しかし、生徒たちがこれからSDGsにある「誰一人取り残さない社会」の実現に向けて、学習指導要領やOECD「ラーニング・コンパス」が示す学びの歩み方が求められているように、私自身もそのように学んでいくことが必要であると感じています。年を重ねるごとに新しいことを学んだり対話を重ねたりすることがおっくうになりがちなのですが、逃げずに学び続けたいです。

〈実技講習会報告〉

感染警戒レベルにより実施への心配もされたが、7月29日（金）、（哲学研修講座は26日）感染症対策を十分に講じながら無事に開催することができた（社会講座は中止）。全体で、約360名が参加し、「学んだことをこれからの授業に活かしていきたい」「時間を忘れて研修に浸り込めた」「新しい知識を教えていただき有意義な時間となった」等、多くの感想が寄せられた。

講習会名	
「書を学ぼう・書こう・楽しもう！～大澤逸山先生に学ぶ書写指導～」	中信ブロック大会事前授業の報告、Chromebookを使った活用事例・教材の共有
「不思議発見！身近な素材で観察・実験」	音楽学習でのデジタル教科書やクロームブックの活用方法
「錫の鑄造体験」	昼のよさを感じよう
プログラムセンサーライトの製作とそれを活かした計測と制御の実験	伝達講習会（幼児の運動遊び・陸上運動・水泳運動・ネット型・ダンス・器械運動等）
哲学と道徳 道徳科の授業づくりと評価	烏川溪谷緑地での水生生物の観察
「ポジティブな行動支援」 「不登校激減法の紹介」	田淵行男記念館作品鑑賞、「田淵行男の世界」、臨地研修 十三屋敷跡
ICTを活用した外国語教育（GIGA スクール研修 in 安曇野）、ロイロノートの紹介、パフォーマンステスト	Chromebookなどの活用・トラブル事例・失敗事例を紹介し合おう
フラワーアレンジメントで癒やしのひとときを	グランド・リッシュの理念と活動について 通信制高校について
今、木村素衛の思想に即して考えたいこと ～私たちの歴史的現在と学びの身体性～	

〈教育会研修日報告〉

11月9日（水）、同好会員を中心に、各会場で研修会が行われた。「日常の授業改善につながる研修になった」「小中の連携について考え合える研修になった」等、短い時間にもかかわらず充実した研修の場になった。

研修内容	研修内容
「日常の実践について交流しよう」	「信州社研中野・下高井大会」について
「中信ブロック算数数学教育研究大会」について	「授業実践の発表と意見交換」
「デジタル教科書学習者用コンテンツの体験」	「特別支援学級における Jam ボードを活用した実践」
「主体的・対話的・深い学びになる体育学習」について	「小学校家庭科や中学校技術家庭科の情報交換会」
「道徳の授業での教師のかかわり方、在り方を一緒に考えてみませんか」	「『表現愛』から ICT について考える」
「第73回長野県児童生徒美術展」審査	「安曇野の偉人 荻原守衛（碌山）を知ろう」
「小中連携について」	「ロイロノートを使ってみよう」
「ICTを活用した健康教育」	「特別支援のための電子教材の有効活用」
「コロナ禍での充実した生活総合実践」	

目で見て、触れて ～安曇野巡検行われる～

7月9日(土)、コロナのため2年間実施ができなかった安曇野巡検を実施することができました。本年度は、目で見て、触れて「長峰山から眺める扇状地『安曇野』・そこで営まれている人々の生活」をテーマに、安曇野市をぐるっとひとまわり北から南へ巡ってきました。

- 標高933メートルから眺める安曇野市の大パノラマ（扇状地と土地利用の様子）
- 国営アルプス安曇野公園のジオラマで見る安曇野の山や河川
- 扇頂・扇央・扇端、それぞれの地形を活かして（克服して）営まれている農業や産業そして人々の生活
- 流れてきた川が突然なくなる黒沢川 その終点は…
- 突然流れがはじまる万水川の始点は… そして、そこを横切る拾ヶ堰

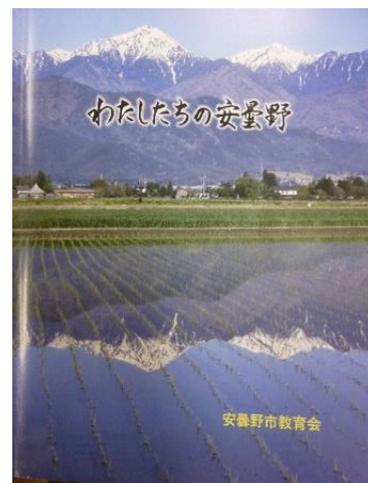
企画から推進まで、安曇野市教育会「社会科資料集編集委員会」の先生方に携わっていただき、講師として、現在、市文書館にお勤めの千村裕一先生にお願いすることができました。当日は、晴天のもと、22名もの先生方に参加をいただきました。

目的地に向かう移動の道中、バスの車窓から見えるありとあらゆるものについて、次から次へと解説を入れてくださる千村先生。さらに、ユーモアたっぷりに、分かりやすく説明していただき、移動の時間が本当に短く感じられました。



安曇野巡検の感想から

- はじめての参加だったが、安曇野の歴史・地形・文化・風俗・産業など多岐にわたって学ぶことができました。講師の千村先生のお話から、いろいろなことが教材としてイメージできました。
- 赴任して5年目になるが、改めて安曇野について詳しく知ることができました。
- 安曇野をいろんな角度から、いろんな方法で見て学ぶことができました。講師の千村先生から教えていただいたこともたくさんありましたが、一緒に参加されていた先生方からもいろんなことを教えていただきました。子どもたちが、この地をもっと誇りに思ってくれるよう、自分も興味・関心をひく授業ができるようになりたいと思います。
- 3年・4年の社会科の授業で、身近な地域安曇野市にある題材を子どもたちの視線でどう教材化していくか、ヒントをいただいた気がしました。



< 東西南北 >

「自戒」



尊敬する元校長の M 先生が五味太郎著『大人問題』を紹介してくださった。読んでみるとこれが実に面白い。これまでの教員人生を反省しながら読んだ。学校の狭い世界を見事に斬る文章から、「五味さんが校長だったらどんな素敵な学校ができるのだろう」と期待すらしってしまった。

「宿題を忘れたことについて怒られるのは『先生が命令したことをなぜ守らないか』ということなんです。君のために、君の将来のためにを思って、とかなんとか、いろいろなニュアンスで言いますが、そのもとは『命令をきかない子』が不愉快なわけです。それこそ、威信にかかわるのです」 『この子のために』という殺し文句を振りかざして強引に指導してきた自分の姿を回顧し、申し訳ない思いが込み上げてくる。と同時に「 さん、怒っちゃダメだよ。言うことを聞かせられない自分の指導力の無さに苛ついて、子どもに当たっているだけだよ」と O 先生に諭していただいた若き日の情景が脳裏をよぎった。

会報安曇野教育 郷土文化財五十二

【Snowy】

かとう だいじろう

加藤 大道（健一郎） 作

加藤先生は明治29年(1896)に旧南安曇郡安曇村で生まれ、その後中国で南宋画の研究をし、画家版画家として活躍されました。右目を失明するという困難を乗り越え、北アルプスの山々や上高地など自然を題材にしたり、雪国の暮らす子どもをテーマにした版画を多く制作されています。この作品は、雪が降り寒さを感じさせる里で、和やかに遊ぶ子どもが描かれており、雪の中でも力強く遊ぶ様子からは温かみを感じられます。加藤先生の作品は、東京国立近代美術館にも18点收藏されています。

(郷土文化財運営委員会)



< 編集後記 >

今回は、各地に赴任されている先生方にご寄稿いただき、それぞれのご活躍の様子をお伝えしました。懐かしい先生方を近くに感じただけの時間となれば幸いです。また、ここ安曇野の地でも、育まれてきた自然や文化、教育への思いを継承しながら、新たな教育実践に向かおうという元気をいただけた気がします。コロナ禍にありながらも、本来の活動が戻ってきた2022年も終わろうとしています。来年がさらに希望の持てる年になることを願うばかりです。皆様、よいお年をお迎えください。